

[課題演習抄録]

課題意識をもって自己成長する子どもの育成
—自己指導能力を基盤とした授業を通して—永 松 あ い
AI NAGAMATSU

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：自己成長，自己指導能力

1 研究の目的

(1) 研究の背景

OECD の Education2030 の序文では、「生徒は好奇心や想像性，強靱さ，自己調整といった力を付けるとともに，他者のアイディアや見方，価値観を尊重したり，その価値を認めることが求められる」としている。また社会を変革し，未来を創り上げていくための力として以下の3つの力をあげている。「①新たな価値を創造する力（既存の意識から新しい知識を生み出す），②対立やジレンマを克服しようとする力（一人一人がより総合的に考える力，他者のニーズや要望を理解する力），③責任ある行動をとる力（自己をコントロール，自己効力感，責任感，問題解決，適応力）」である。

また福岡県教育センターは，学習面において，知識や理解といった認知的側面からの評価に偏り，学ぶ意欲や態度といった情意的側面は軽視されてきたことを指摘している。これを踏まえ，福岡県教育センター（平成8年）「生徒指導の視点に立った授業づくり」では，学校生活の中でも重要な割合を占める授業の中で，生徒指導の機能（自己指導能力）を活かすことが重要であるとしている。

これらのことから，これからの社会を切り拓くために，子どもたちは自分自身で課題意識を把握・見出す力，他者とより良い人間関係を構築していく力を身につける必要があると考える。

(2) 研究の意義

本研究では，自己指導能力を，自己決定，共感的人間関係の構築，自己存在感の実感ができる力であるとする。

本研究では，子ども達が学習や生活の中で，明確な課題意識をもち，その子なりに成長することができるようにする。そのため，「子どもが自己指

導能力を発揮することを基盤とした学習を通して，『できるようになった』『よくわかった』という自己の成長を実感できるようにするとともに，『もっとこうしていきたい』『次はこうしたい』といった意欲につながる学習過程や具体的な方途について明らかにすること」を目的としている。

2 研究の計画

MS2 前期	理論研究，文献研究
MS2 後期	理論研究，アンケートによる子どもの実態調査
MS3 前期	算数科における自己指導能力を基盤とした授業の実施
MS3 後期	体育科における自己指導能力を基盤とした授業の実施

3 研究の内容

(1) MS3 前期授業の実際

算数科学習指導において，次のように指導した。

教科	算数科
単元	比例の関係
日時	令和2年7月29日・30日
対象	第5学年 35名
教師の手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の確認，自己の結論をつくる時間の確保（児童の自己決定の場づくり） ・それぞれの考え方や解き方を話し合う時間の設定（共感的人間関係の構築） ・お互いの考えのよさを認め合い，それぞれの学びの伸びを確かめる場面の設定（自己存在感の実感）

比例の問題の解き方に関する子ども達の話合いにおいて，公式に当てはめて説明する子どもや表を活用して説明する子どもの姿が見られた。

- C1：どんな方法で問題をといた？
 C2：僕は表を縦に見て行って、代金をだしたよ。
 C3：わたしは式で表したよ。そのほうが簡単にできるから
 C4：どんな式になったの？
 C5： $\square \times \triangle = 80$ で当てはめるの。
 T1：どの方法がやりやすいかな？
 C6：僕は C5 さんのやり方がわかりやすいからほかの問題もこれで解いてみたい。
 C7：僕は表を使ったほうがときやすいから表を自分で作ってみる。

ここでは、「自分はこうしてみたい」「自分の決めたやり方でやってみたい」といった自己指導能力につながる意欲が見られた。振り返りの中でも「もっとこうしたい」「次はこうやって解きたい」といった自己決定につながる感想も見られた。また C6 の発言のように、友達のを考えをもとにし、自分の考えをつくるといった共感的人間関係の構築につながる姿が見られた。このように学習の中で、成長した自分の姿を子どもが実感している。学習意欲の高まりや、自己成長の実感、自己指導能力が学習の中で発揮された結果である。

(2) 後期授業の実際

体育科学学習指導において、次のように指導した。

教科	体育科
単元	跳び箱
日時	令和2年12月9日・10日
対象	第5学年 35名
教師の手立て	<ul style="list-style-type: none"> 各児童の課題確認、実態に応じた跳び箱設置の工夫（児童の自己決定の場づくり） アドバイスを聞き合う時間の設定（共感的人間関係の構築） 各児童が自分の動きの高まりを動画で確認できるようにタブレットを設置（自己存在感の実感）

A児を含む数人の子どもは当初写真の一番低い跳び箱型マットの上でも台上前転ができなかった。その後マットだけで



写真 3 段階の高さを選べる跳び箱

前転の練習を始め、友達からのアドバイスなどを

受けながら練習することによって、台上前転の着地までできるようになった。さらに複数の子どもが前転の課題に対して「自分は克服できた」という実感を持つことで、「もっと上手になりたい」「次の場での練習に行きたい」という自己の成長の実感や挑戦意欲の高まりが見られた。振り返りでは、次の時間は発展技に挑戦してみたいという新たな課題をもつ子どもが2/3以上おり、次の課題解決への意欲の高まりが見られた。

(3) 実践の成果と課題

- 課題解決へと向かうための比例の問題の解き方や、台上前転の練習の場を自身で決定することにより自分の課題を意識し、さらに次の課題解決への挑戦意欲の高まりが見られた。
- 課題解決のための話し合いで、互いに友達の考えの良さに気づき、自分の考えを見直すことにつながった。
- 課題解決後の学習の振り返りにおいて、学力の実態に応じて難易度の異なる練習問題を用意し、子どもが選択・挑戦できるようにする。

4 成果と課題

算数科、体育科学学習の課題解決においては、子どもが自己決定、共感的人間関係の構築、自己存在感の実感等の自己指導能力を学習の中で発揮することが重要である。実証授業において、課題解決のために活用できる既習内容や、これまでの経験を振り返り吟味する子どもの姿が見られた。さらに課題解決において、解決出来た時の喜びを次なる課題解決への意欲につなぐ子どもも見られた。また子どもたち同士で高め合う姿、自分が認められ喜んでいる子どもも見られた。このことから教科を問うことなく、どのような教科でも自己指導能力を基盤とした学習指導を行うことが重要であると考えられる。

今後は同一学年同一教科に限らず、他学年、他教科における自己指導能力を基盤とした学習指導においても検証する必要がある。

主な引用・参考文献

福岡教育センター生徒指導の視点に立った授業づくり H8年

OECD Education 2030 プロジェクトについて 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室 最終アクセス 2020.09.22

https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf